

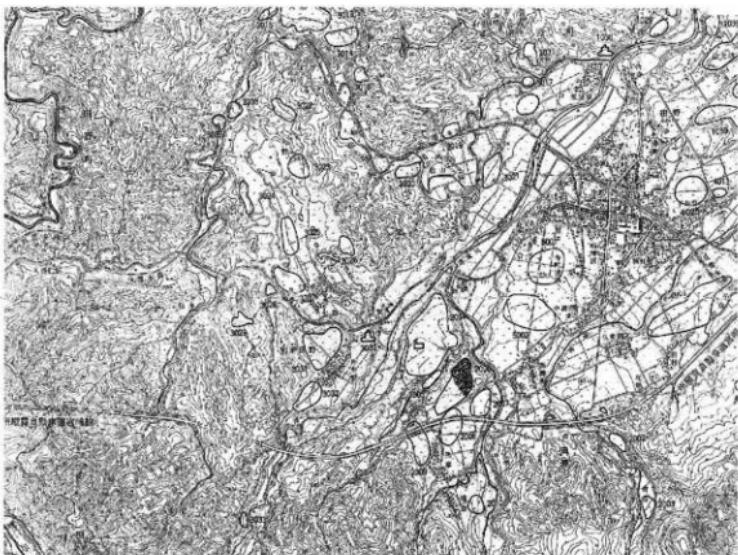
田野町文化財調査報告書第44集

もと の はる い せき
绳文集落 本野原遺跡

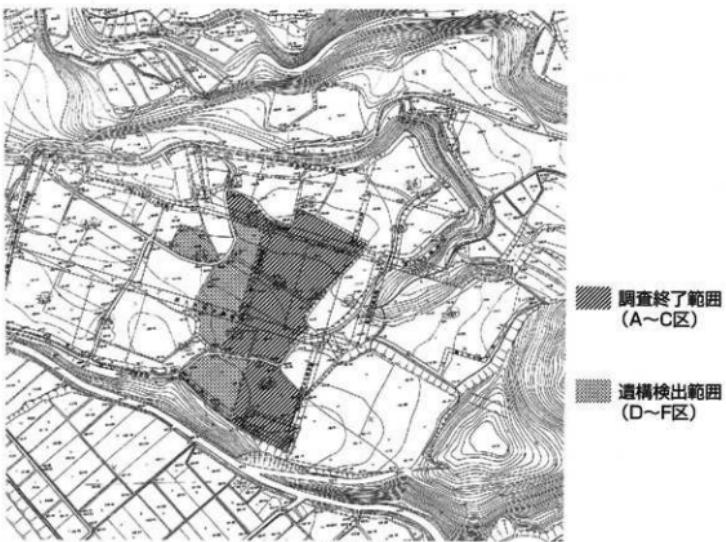
県営農地保全整備事業元野地区に伴う埋蔵文化財調査報告書

2002年

宮崎県宮崎郡田野町教育委員会



遺跡周辺地形図



調査区位置図

調査の経緯

田野町は宮崎市の西方約20kmに位置し、南那珂山地を始めとする山々と丘陵に囲まれ、盆地状に開けた市街地の周辺には、台地及び河岸段丘が広がる。この台地や河岸段丘では、現在では主にタバコや大根などの畑作が営まれるが、近年頻繁に実施されるようになった農地の改良事業や各種開発事業に伴い発掘調査が行われ、先史時代の遺跡が分布していることが明らかになった。

平成13年度は、県営農地保全整備事業元野地区が実施されることになり、事業地内における埋蔵文化財の分布状況を確認するために試掘調査を行ったところ、台地平坦面のほぼ全面より、縄文後期の遺物が大量に出土し、遺構も多数確認された。平成13年4月に宮崎県中部農林振興局、宮崎県文化課、町農業整備課、町教育委員会の四者で協議を行った。その結果、設計施工上消滅を免れない部分について発掘調査による記録保存を実施することとなり、宮崎県中部農村振興局と委託契約を締結し、後である同月23日より現地の調査に着手した。

調査の結果、100軒を超える住居や、多量の遺物に加え、多数の土坑が調査区南部から確認された。この土坑群は環状に巡っており、その外側から掘り鉢状に土地が整地されたことも明らかとなった。この環状土坑群のほかに、ほぼ南北に軸を持った土坑列も検出されている。それまで西日本で見られる縄文遺跡とは大きく異なる様相であるため、学術的に極めて重要な価値があるという判断の基に再度協議を行い、調査終了後は消滅する予定であった調査区を保存することとなった。調査は2月初頭を以って一旦終了し、B・C区に関してはシラスによる盛土を行い、D～F区の調査区はシートを覆い保護を行った。

調査の体制

調査主体 宮崎県宮崎郡田野町教育委員会

調査組織 田野町教育委員会 教育長 堀内 侃（4～9月）
西田 英介（10～3月）

社会教育課長 永谷 弘

社会教育課長補佐 川越 修治

社会教育係長 後藤 敏典

調査事務担当 副主幹 松山勝子

同主査 森田浩史

調査担当 同主査 森田浩史

同主任 金丸武司

同嘱託 久保憲司（4～12月）

同嘱託 吉住さと子（6～3月）

調査指導 文化庁記念物課主任文化財調査官

岡村道雄

調査支援業務 株式会社埋蔵文化財サポートシステム

九州航空株式会社

遺跡の立地と歴史的環境

本野原遺跡は、田野町の中心部から南々西にある、東側に延びる台地上にある。遺跡一帯の標高は180m前後であるが、河川の浸食作用等の影響もあり、調査区周辺は起伏に富んでいる。

調査区及びその周辺は、黒草遺跡(旧称)として、特に縄文時代の資料が豊富な地点として知られていた。昭和46年には宮崎大学により試掘調査が行われ、今回の調査により当時のトレンチのうち1力所を把握できた。また、平成6年度には、宮崎県文化課により試掘調査が行われ、アカホヤ火山灰を挟んで上下に縄文時代早期と後・晚期の遺構・遺物を多数包含していることが確認されている。

本野原遺跡を含む一帯(黒草・楠原・元野地区)は、縄文時代を中心とする遺跡が密集する地点である。

元野地区の南側にあたる楠原地区には、縄文時代早期末及び晚期の組織痕土器が出土した畠田遺跡、西方には細石器文化期と縄文時代早期末の遺物が出土した黒草第2遺跡、その北隣に縄文早期を中心として旧石器時代、縄文時代草創期、前期、中期とほぼ絶えることなく遺物が出土した元野河内遺跡、本遺跡の川を挟んで北側には縄文時代中期春日式期と弥生時代中・後期の遺跡である本野遺跡、縄文時代の早期と後期の集落跡である高野原遺跡が立地する。なお、やや距離を置く七野地区台地北部には、後期初頭～中葉の遺跡で31軒の竪穴住居を検出した丸野第2遺跡が立地する。

このように、本野原遺跡の立地する元野地区及びその周辺の遺跡からは、縄文時代早期にピークを持ちながら、旧石器・縄文時代を通じて、遺跡が絶えることなく継続する状況を見ることができる。

旧地形について

今年度の調査区である本野原台地東部は、近年になり大規模な削平が何度も行われたため地形が大きく変化している。かつては、A区とB区の傾斜が維持しており、台地南東部にある小高い丘は、かつてはA区の傾斜面と直結していた。その間を削平した際に生じた土砂は、C区南東部の谷を埋めるために使われたようである。なお、この谷の基点には、湧水点があったといわれている。また、丘陵地は調査区の北側にも存在していた。

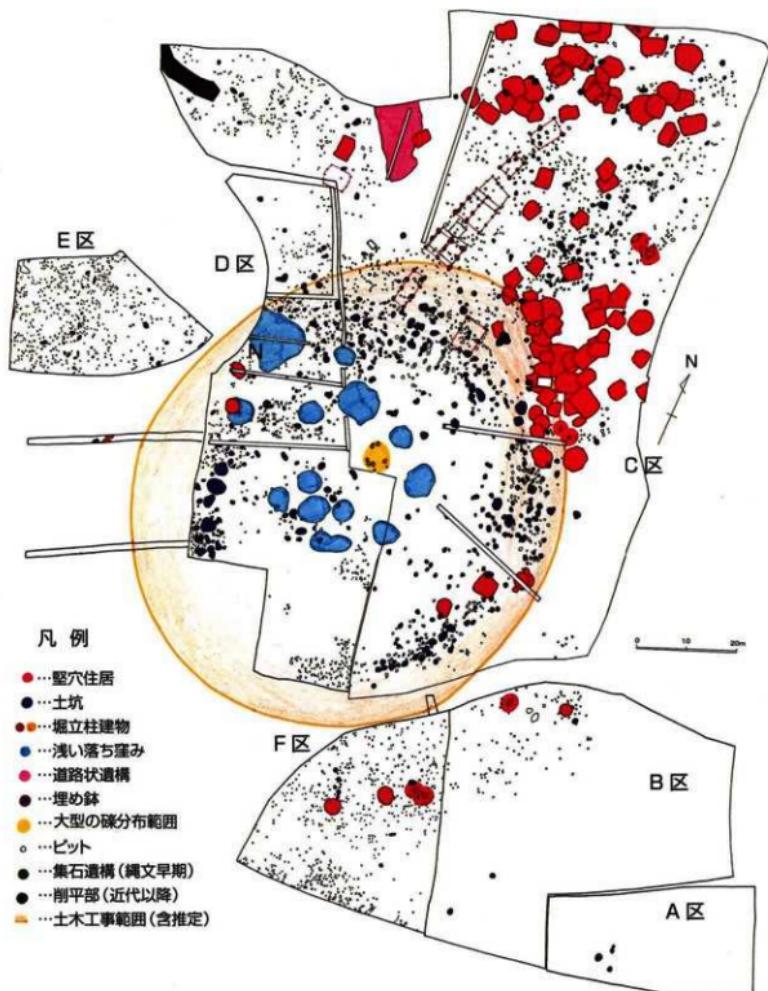
これらを基に、先史時代の本野原台地東側の地形を想定すると、調査区の北部と南東部が隆起し、湧水点からの侵食により東側に深い谷を刻みながら、全体的に南部から北部に向けて緩やかに傾斜する地形であったと考えられる。

遺跡の概要

本野原遺跡からは台形様石器を始め、剥片尖頭器、ナイフ形石器、角錐状石器、細石刃核が少量確認されている。多くが表面採集によるものであるが、これらの存在によって、遺跡の形成が旧石器時代まで遡ることが明らかとなっている。

縄文時代では、まず早期前葉にあたる加栗山式土器がトレントから出土しており、調査区内からは同時期と考えられる集石遺構が確認されている。C区より検出された集石遺構

本野原遺跡遺構分布図(縄文時代のみ)



は窪地内にあり、縄文後期に構築された土坑とほぼ同じ高さで検出されたが、これは後に述べる土木工事の結果と考えられる。なお、縄文時代早期の遺物としては、ごく少量ながら平柄式土器が出土している。

縄文時代前期は、覆土中から羽島下層式土器が、床面直上から轟B式土器が出土した竪穴住居が1軒検出されている。続く中期は、阿高式土器が覆土上層から出土する竪穴住居が主に調査区北部より数軒検出されている。

縄文時代後期は、最も遺構が残された時期である。竪穴住居は、調査区の北部と東部において集中が認められ、その総数は113軒に上った。プランは円形、隅丸方形、長方形に大別できる。住居からは、多量の遺物が出土したが、覆土上層からの出土が多く、また殆どが小片であった。一方、床面直上から確認された土器はごく僅かである。

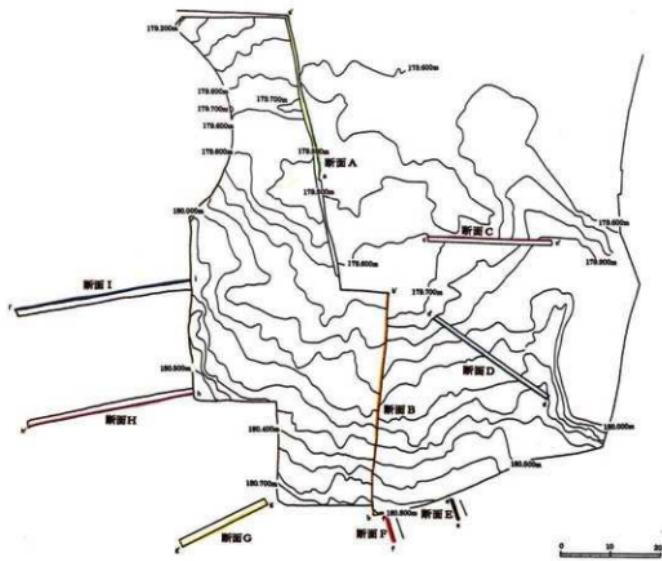
土坑は、調査区中心部若しくは広場的空間と想定される部分を除く、ほぼ全面から検出された。なかでも調査区南部は、環状の配置を見ることができる。径は約40mに達し、形状や規模は様々であるが、覆土上に、堅果類の炭化物や、骨粉が確認された。

環状土坑群の一回り外側には、不自然な落ち込みが確認された。落ち込みは、最も深い地点では阿多火碎流の直上まで下がっており、アカホヤ火山灰層の降灰までは緩傾斜面であった地形が、円形の窪地状になる状況を見ることができる。これを自然地形とするならば、窪地の中央部周辺は阿多火碎流が降灰した10万年前から約97万5千年もの間、局地的に上層が堆積しなかった状況を想定せねばならない。しかし、窪地内の遺構が縄文後期遺物包含層を取り除いた時点で検出された事と、縄文後期の遺物包含層が平安時代の遺物包含層とは明確に異なる事から、縄文後期の段階に大規模な土木工事が行われたと判断するに至った。この中心部付近からは、敲打痕や研磨痕を持つ大型の礫が集中しているほか、その外周には、阿多火碎流まで掘り込まれた円形の浅い落ち込みが数基検出された。

調査区中央部には、一定の大きさと深さを持つ掘立柱建物状の土坑列が検出された。南端からは4基が2列、その北側に3基が3列、更に北には4基が3列というまとまりがある。それぞれの主軸はほぼ一致して整然と並んでおり、あたかも柱穴のようである。

調査区の湧水点に向かう南東部の斜面上からは、夥しい量の土器が出土しており、残存状態が極めて良好であることや、出土土器が時期的に近いものが多いことから、土器廐棄場と考えられる。また、調査区北西部からは落ち込みが数mにわたって確認されており、硬面を持つことから道路状遺構であると推測される。

遺物に目を向けると、土器の出土は膨大な量にのぼるが、これらの殆どは南九州の縄文後期土器として、「在地系」と一般的に呼ばれる土器であり、磨消縄文土器の出土は、ごく少量に過ぎない。石器組成では、石鏃が極端に少ない一方で、磨製石斧、磨石、石皿の比率の高さが際立つことから、植物質食料に依存した生活が想定される。また、切目石錘や十製円盤(通称メンコ)が多く出土する一方で、土器片錘や土偶は1点も出土していない。



土木工事内コンタ図及び断面照合図



調査区内俯瞰写真

「窪地状の整地」の成因

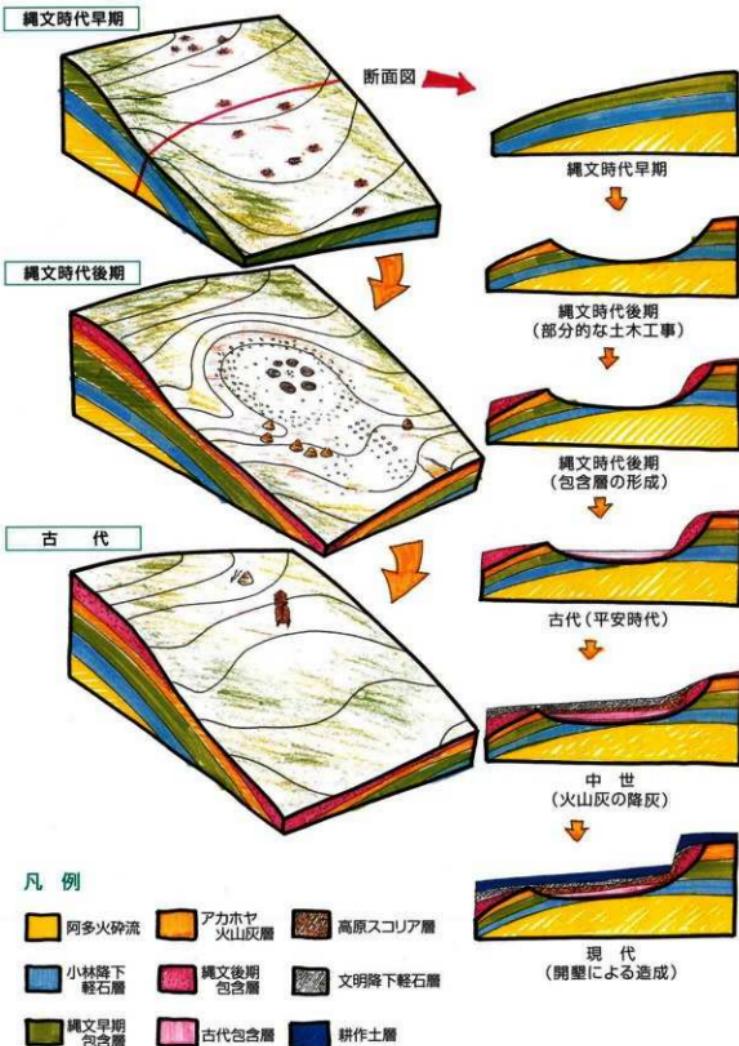
- ① 約10万～9万5千年前、阿多火砕流が降灰。火砕流は、礫を巻き込みながら元野地区一帯に分厚く堆積した。
 - ② 約2万5千年前に、始良丹沢火山灰が降灰。この火山灰は、降灰後に多くが元野地区の斜面に沿って調査区外に流出し、僅かにA区の縁辺に見られる程度に過ぎない。なお、この時阿多火砕流は、巻き込んだ礫により流出を免れた。
 - ③ 約1万5千年前、小林降下軽石が降灰する。この火山灰は著しく硬かったため、これも流出せず、遺跡内に残った。
 - ④ その後、粘質土に統いて、縄文早期のローム層が堆積する。この層の堆積中に、縄文早期前半(約9千5百年前)の人々が集石遺構を構築した。
 - ⑤ 大隅降下軽石、アカホヤ火山灰が降灰。続き御池火山灰も降灰するが、殆どが流出。
- * ここまで間、調査区内は北々東に向けて緩やかに傾斜しており、調査区の東側は湧水点に始まる谷が深く刻まれていた地形が確認されている。
- ⑥ 縄文後期の段階で、人為的な掘り塗めが行われる。これは、調査区南部に円形に行われており、それまで緩傾斜面であった地形が、中心部に近くなるほど深く削り込まれ、壠り鉢状を呈している。この「縄文時代の土木工事」は、最も深い地点では、阿多火砕流近くにまで達している。ただし、この際に生じた土砂の行方は不明である。
 - ⑦ 平安時代の段階に、2棟の掘立柱建物と1軒の住居址が構築され、布痕土器等の遺物を含む層が形成される。この包含層と、下層の縄文後期遺物包含層は色調が明確に異なり、後期包含層からは、古代の遺物は出土しない。
 - ⑧ その後、古代末期に高原スコリア、中世に文明降下軽石が降灰する。これらの層は、調査区内では、窪地の内側のみの確認である。
 - ⑨ 近世以降、一帯を開墾する為に土地に手が加えられる。掘り込みによる斜面に土留めのための石が積まれ、段を持つ畑が作られるようになった。その際、縄文後期や古代の遺物包含層の一部が破壊され、畑の表面に遺物が散布する状態が形成された。

九州島内における本野原遺跡の位置付け

九州島内における縄文時代は、草創期・早期以降は、南九州全域に分厚く降灰したアカホヤ火山灰の影響などにより遺跡が減少すると、以後は早期ほどの遺跡の密集はみられず、全国的な「東高西低」の図式の中に取り込まれた状況となる。

この状況は、縄文時代後期に起こった、いわゆる「磨消縄文土器の発生」によって大きな展開を見せる。これは、後期初頭に成立した、磨消縄文と言う二次元的な文様表現を行った土器が、中部山岳地帯などの東日本から広く拡散した現象を指すものであり、この拡散によって、西日本では遺跡数が急激に増加した。東九州の沿岸部や五ヶ瀬川流域では、西南四国で成立した、磨消縄文土器の傍流である宿毛式土器を主体とする遺跡が登場する。内陸部では、中期の阿高式土器を継承した岩崎式土器が分布するが、宿毛式土器を伴って

本野原遺跡内の土層推積模式図



土層断面図 (S=1/200)



九州内に上陸した集団とは、土器そのものの交流だけでなく、その後に成立した指宿式土器の施文手法や調整は、両者の間で活発に情報が交換されたことが窺える。

ただし、後期に遺跡数が増加すると言っても、単純に東高西低の状態が崩れた訳ではない。確認される住居の軒数にしても、九州は中・四国と比べ多くはあるが、東日本の後期遺跡と比較すると、依然として大きな開きがある。また、東日本では各地で発見されている大型掘立柱建物や大型住居、環状盛土遺構は、九州内には例がなく、縄文時代の集落形態として知られる環状集落は、福岡県アミダ遺跡や熊本県中堂遺跡でも見られるが、直径20m前後と、やはり小規模である。

本野原遺跡から検出された遺構は、こうした九州の縄文遺跡とは様相が大きく異なる。

調査区内で現在確認されている住居の軒数は113という数に上っているが、九州内で確認された縄文遺跡としては、宮崎県平畑遺跡(67軒)、熊本県石の本遺跡(83軒)を大きく上回る。また、調査区で確認された土坑列は、縦横に立ち並ぶまとまりから、3軒の掘立柱建物の立ち並びが想定できる。柱穴の規模は通常の掘立柱建物よりも遥かに規模が大きく、東日本で言われる大型掘立柱建物に類似する。このような建造物は西日本では初例となる。調査区南部の環状土坑の多くは墓壙と考えられるが、一部貯蔵穴や掘立柱建物の可能性もある。また内側にある、石を伴う小ぶりの土坑は、祭祀的な性格もしくは墓坑と推測される。

円形の掘り塗めは、環状盛土遺構と併せて、縄文後期の関東地方で見られる土木工事の象徴的形態である。この「掘り塗め」という行為については、現時点ではその存否について議論が必要な段階であるが、栃木県寺野東遺跡や、千葉県をはじめとした縄文後期遺跡では、その可能性が指摘されている。九州という遠隔地において、関東地方で行われた土木工事が、類似した状態で検出されることは極めて珍しく、驚くべき事例と言える。

本野原遺跡は、遺構の上では東日本の影響が強く反映されており、九州島内においては空前とも言えるほどの大規模遺跡である反面、遺物からは、その影響は殆ど窺い知ることは出来ず、極めて在地性の強い要素が窺える。このアンバランスな在り方は、縄文時代の情報ネットワークの内容を知る上で、極めて重要な視座を与えるといえよう。

* 調査にあたっては、以下の方々のご指導・ご協力を得ました。記して感謝申し上げます。(敬称略・五十音順)
秋成雅博、飯田賢治、石川悦雄、井田鷲、池田朋生、池畠耕一、伊東但、伊藤雅乃、今田しのぶ、今田秀樹、岩永哲夫
宇多津徹朗、大西智和、岡村道雄、岡本真也、西高哲朗、司児康典、鎌田次郎、上村俊雄、河野樹一郎、黒川忠広
桑畠光博、甲元真之、小森晶子、重留麻弘、島岡武、島田正浩、白岩修、代田博文、新東晃一、菅付和樹、角南聰一郎
早田勉、大學泰宏、高橋浩子、太川裕晴、竹井真知子、田子さやか、谷口武範、田ノ上智也、千葉聰、出合宏光
時津裕子、外山隆之、中國聰、中村真理、鈴井良子、西田泰民、福宣田佳男、橋本英俊、原田亜紀子、東澈章
日高敬子、日高広人、平原英樹、廣田昌子、北郷泰道、本田道輝、前追亮一、松林豊樹、松本安紀彦、水ノ江和同
八木澤一郎、矢野健一、山崎純男、吉澤壹行、吉本正典、宮崎県中部農林振興局、田野町土地改良区



調査区全景



調査区遠景(南から)



環状土坑群近景(南から)



古代土器出土状況



縄文早期集石遺構検出状況



大型の砾検出状況



土器溜まり検出状況



住居内遺物出土状況



壠立柱建物調査前近景



土坑半裁状況



土坑検出状況



道路状遺構検出状況



埋鉢検出状況

出土遺物



出土遺物

